様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２８２０

研究課題名（和文）対象的実践の協同としての体育における学びのデザイン開発

研究課題名（英文）Designing physical education as collaborative learning via targeted practices

研究代表者
岡野　昇（Okano, Noboru）

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：２０３１４１０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：体育における協力学習と協同的学びの混同と混乱を生じさせないために、本研究では「主体的・対話的で深い学び」を「〈自己・他者・対象〉の三位一体としての学び」と捉え、体育における学びを「対象的実践の協同としての学び」として再定義した。そして、幼稚園・小学校・中学校における包括的な運動（遊び）プログラムについて、共感を育成する身体運動の枠組みと各運動種目の身体技法（わざ）の枠組みから開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、「社会情動的発達の視点」と「認知発達の視点」と「文化的価値の視点」から、包括的な運動（遊び）プログラムを提示したことである。これは、「体育の学習内容の質保障」と同時に、「教師の授業づくりと教材研究の自律性」を促すものとして位置づけることができる。また、コロナ禍で可視化された身体的コミュニケーションの重要性、運動（遊び）の中で共鳴・共振しながら学ぶ意義を包含するものでもある。

研究成果の概要（英文）：To avoid confusion between cooperative and collaborative learning in physical education, this study defines proactive, interactive, and authentic learning as learning that occurs with the self, others, and various objects. In this study, physical education was redefined as “collaborative learning via targeted practice.” A comprehensive exercise (play) program was developed for kindergarten, elementary school, and junior high school students based on a physical exercise framework that teaches techniques for each exercise type and fosters empathy.

研究分野：体育科教育学　学校教育学

キーワード：体育学習　運動遊び　学び論　主体的・対話的で深い学び　協同学修　学びの共同体

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学校現場では、2012 年 8 月の中央教育審議会答申で「能動的学修（アクティブ・ラーニング）」が登場してから、グループ学習による授業形態が広がりを見せている。日本で普及しているグループ学習とその理論的基礎は、おおよそ三種類に整理できる。第一に「班学習」であり、1930 年代から 1960 年代にかけて普及した集団主義（collectivism＝集産主義）の伝統を持つ「集団学習」である。第二に「協力学習（cooperative learning）」であり、アメリカや日本で最も普及している「話し合い」学習を中心とする、Johnson,D.W.&Johnson,R.T.や Robert E.Slavin らの理論によるものである。第三に「協同的学び（collaborative learning）」であり、「聴き合う」関係を基盤とする、Lev Vygotsky の発達の最近接領域や John Dewey の民主主義と対話的コミュニケーションの理論を基礎とするものである。三種類のグループ学習は授業形態が同じように見えても、基礎的理論は異なることを理解しておく必要があろう。

その中でも、協力学習と協同的学びの違いには注意が必要である。この二つに共通するのは、学習者（私）と〈他者〉との相互交流の存在であるが、協力学習では学習者（私）と〈対象〉、学習者（私）と〈自己（体育の場合は身体）〉の相互交流が見えにくくなっている。小学校では「グループ学習を用いたアクティブ・ラーニングは既に取り組んでいる」、中学校では「（一斉授業の中に）グループ学習を導入した」という類の声をよく聞くが、その結果、小学校では「学力の伸びに効果があまり感じられない」、中学校では「生徒の落ち着きは出てきたが学力向上には結びついていない」という声も少なくない。これらは、〈対象〉と〈自己〉を喪失した〈他者〉とのかかわりに特化した話し合い学習は、クラスの雰囲気をよくするものではあっても、その教科でしか学ぶことができない真正な学び（authentic learning）を失いかねないことを示唆している。テキストと活動の喪失からくる〈対象〉の疎外と学ぶことの意味の喪失からくる〈自己〉の疎外は、結果として学力の停滞と自尊感情の低下につながるものと考えられる。つまり、多くの学校では「学び合い」という名のもと、協力学習としてのグループ学習に取り組んでいることが推察される。

特に、現行学習指導要領の総則に記載されている「学習の対象となる物事」の解釈については、〈対象〉の喪失と結びつけることが重要になってくるであろう。本研究の対象教科として取り上げる体育においては、〈対象〉の喪失は「活動あって学習なし（学習内容の不在）」、「学習者の意欲を喚起する授業（行き過ぎた主体主義）」、「言語活動に傾倒した体育授業（運動量の減少）」、「仲間づくりとしての体育授業（体育の道徳化）」などという形で、これまでも問題視されてきた。体育における協力学習と協同的学びの混同と混乱を生じさせないためには、現行学習指導要領で授業改善のための視点として示された「主体的・対話的で深い学び」を、「〈自己・他者・対象〉の三位一体としての学び」ととらえ、体育における学びを「対象的実践の協同としての学び」と再定義することが肝要となってくる。

２．研究の目的

そこで本研究は、21 世紀型の体育の授業と学びの実現に向けて、「対象的実践の協同としての学び」を基盤とした、幼稚園・小学校・中学校にわたる体育（運動遊びを含む）における学びのデザイン開発を目的とし、三つの研究課題を設定した。第一は幼小接続を重視した幼稚園における『運動遊びのデザイン』の提出、第二は小中連動を重視した『中学校保健体育の学びのデザイン』の提出、第三は幼稚園・小学校・中学校における包括的な運動（遊び）プログラムの提出である。

３．研究の方法

本研究では、目的遂行のために、次の三つの課題を設定した。

【研究課題 1】では、幼小接続実践研究プロジェクトを立ち上げ、幼小接続を重視した幼稚園における運動遊びのデザインの開発を行うこと。

【研究課題 2】では、小中連動実践研究プロジェクトを立ち上げ、小中連動を重視した中学校保健体育における学びのデザインの開発を行うこと。

【研究課題 3】では、幼稚園・小学校・中学校における包括的な運動（遊び）プログラムの提出を行うこと。

４．研究成果

【研究課題 1】の幼小接続を重視した幼稚園における運動遊びのデザインでは、子どもに現れている問題行動の解決に向けて、認知発達の基盤となる身体に着目し、共感を育成する身体運動の枠組みについて検討した。そして、「年長児（5 歳児）を対象とした 1 年間のプログラム」と「共感を育成する身体運動の枠組みに基づいた動画入りプログラム」を作成した。

【研究課題 2】の小中連動を重視した中学校保健体育における学びのデザインでは、各運動種目における運動の世界の考え方や、身体技法（わざ）の見方を前面に出した編集スタイルをとった。具体的には各運動種目について、全 4 頁のうち、2 頁は生徒用の読み物として、もう 2 頁は

教師用の研究資料としてまとめた。前者は各運動種目における学びのイメージをつかみやすいように、シンプルかつ図やイラストによる解説を試みた。また、後者は運動経験や指導経験による学習指導を問い直すために、最新の研究論文等を引用した解説を掲載した。

【研究課題 3】は、幼稚園・小学校・中学校における包括的な運動（遊び）プログラムの提出にかかわり、リズムダンスの内容の強化を図った。主たる成果として、幼稚園から小学校低学年を対象としたリズムダンス動画及び解説を２本、小学校中学年を対象としたリズム動画及び解説を２本、小学校高学年を対象としたリズムダンス動画及び解説を１本、中学校を対象としたリズム動画及び解説を１本、計６本のデジタルコンテンツの開発及び音楽性を大切にしたリズムダンスのデザインの行い方を開発した。

以上の成果は、幼小接続実践研究プロジェクト及び小中連動実践研究プロジェクトの取り組みによるものである。同プロジェクトは「学びの会」として開催し、実践提案・実践報告・研究成果の還元等を行った。会の内容は以下のとおりであり、39 回の開催、729 名の教職員等の参加があった。

〔2023 年度：6 回開催、146 名〕

2023.12.26-27　脱・学校ダンスの実践報告　38 名
2023.11.06　北信学校体育研究会の交流実践⑯（on line）　6 名
2023.10.18　北信学校体育研究会の交流実践⑮（on line）　13 名
2023.08.07　北信学校体育研究会の交流実践⑭（on line）　14 名
2023.07.30　脱・学校ダンス～リズムダンスの新デザイン　50 名（こども 12 名含む）
2023.06.03　小学校低学年における学びのあり方　25 名

〔2022 年度：10 回開催、144 名〕

2023.03.26　研究論文発表会　34 名（ハイブリッド）
2023.01.17　北信学校体育研究会の交流実践⑬　14 名（on line）
2022.10.09　対象的実践の協同としての学びのデザイン⑫　11 名（on line）
2022.10.04　北信学校体育研究会の交流実践⑫　12 名（on line）
2022.09.18　対象的実践の協同としての学びのデザイン⑪　9 名（on line）
2022.09.04　対象的実践の協同としての学びのデザイン⑩　13 名（on line）
2022.08.08　北信学校体育研究会の交流実践⑪　19 名（on line）
2022.07.31　対象的実践の協同としての学びのデザイン⑨　10 名（on line）
2022.06.12　対象的実践の協同としての学びのデザイン⑧　11 名（on line）
2022.05.15　対象的実践の協同としての学びのデザイン⑦　11 名（on line）

〔2021 年度：11 回開催、159 名〕

2022.03.26　対象的実践の協同としての学びのデザイン⑥　9 名（on line）
2022.03.05　対象的実践の協同としての学びのデザイン⑤　8 名（on line）
2022.02.06　対象的実践の協同としての学びのデザイン④　8 名（on line）
2022.01.22　北信学校体育研究会の実践交流⑩　15 名（on line）
2021.10.08　北信学校体育研究会の実践交流⑨　16 名（on line）
2021.08.29　対象的実践の協同としての学びのデザイン③　13 名（on line）
2021.08.06　北信学校体育研究会の実践交流⑧　24 名（on line）
2021.07.22　対象的実践の協同としての学びのデザイン②　12 名（on line）
2021.07.09　北信学校体育研究会の実践交流⑦　20 名（on line）
2021.05.22　北信学校体育研究会の実践交流⑥　21 名（on line）
2021.05.04　対象的実践の協同としての学びのデザイン①　13 名（on line）

〔2020 年度：12 回開催、280 名〕

2021.03.28　ボール運動・球技に関する実践報告　15 名（on line）
2021.02.28　北信学校体育研究会の実践交流⑤　23 名（on line）
2021.01.31　北信学校体育研究会の実践交流④　23 名（on line）
2020.12.28　実践研究交流　22 名（on line）
2020.12.20　北信学校体育研究会の実践交流③　24 名（on line）
2020.11.13　北信学校体育研究会の実践交流②　22 名（on line）
2020.10.25　北信学校体育研究会の実践交流①　25 名（on line）
2020.06.28　ウィズコロナ・ポストコロナにおける体育の学びのデザイン　34 名（on line）
2020.05.23　コロナ禍で浮き彫りにされた「協同と探究の学び」の大切さ　55 名（on line）
2020.05.05　鉄棒運動カリキュラムマップ及び休校解除後の学びのデザイン　11 名（on line）
2020.05.04　学びの深まりの可視化及びリレーにおける聴き合い　13 名（on line）
2020.05.02　休校解除後の体育を考える　13 名（on line）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岡野　昇	４．巻 70(6)
２．論文標題 ICT端末を「学びの道具」にするということの意味	５．発行年 2022年
３．雑誌名 体育科教育	６．最初と最後の頁 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡野　昇	４．巻 69(5)
２．論文標題 陸上運動［競技」で修得をめざす身体技法（わざ）とは	５．発行年 2021年
３．雑誌名 体育科教育	６．最初と最後の頁 16-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 若林徳亮・岡野　昇・加納岳拓	４．巻 73
２．論文標題 体育の協同的学びにおけるボールゲームの発達過程：ネット型ゲームの実践事例を通して	５．発行年 2022年
３．雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 351-361
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡野　昇	４．巻 68(5)
２．論文標題 学びの基盤を育むための三つの運動遊び	５．発行年 2020年
３．雑誌名 体育科教育	６．最初と最後の頁 26-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 横田幸大・加納岳拓・岡野　昇	4．巻 72
2．論文標題 小学校体育のリレーにおける「聴き合い」としての学びに関する実践的考察	5．発行年 2021年
3．雑誌名 三重大学教育学部研究紀要（教育実践）	6．最初と最後の頁 273-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加納岳拓・八木規夫・後藤洋子・鶴原清志・冨樫健二・岡野　昇・重松良祐・大隈節子	4．巻 27
2．論文標題 コロナ禍における大学生の健康の保持増進を目的とした運動プログラムの検討：2020年度前期「スポーツ健康科学a」の実践から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 三重大学高等教育研究	6．最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 加納岳拓・岡野　昇・横山慶子・柳瀬慶子・山本裕二
2．発表標題 体育における共感の育成を目指した身体運動
3．学会等名 日本学校教育学会
4．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

1．著者名 友添秀則・遠藤　隆 著作者代表、石川泰成・上地　勝・大塚幹太・岡野　昇・加納岳拓・股村美里・森良一・柳瀬慶子・山合洋人 ・大修館書店編集部ほか	4．発行年 2021年
2．出版社 大修館書店	5．総ページ数 184
3．書名 『最新 中学校保健体育』授業展開朱書き編	

１．著者名 石川泰成・上地　勝・大塚幹太・岡野　昇・加納岳拓・股村美里・森　良一・柳瀬慶子・山合洋人　・大修館書店編集部ほか	４．発行年 2021年
２．出版社 大修館書店	５．総ページ数 160
３．書名 中学校保健体育科教科書『最新 中学校保健体育』準拠 授業展開研究編①	

〔産業財産権〕

〔その他〕

岡野昇研究室　三重大学教育学部 https://okanolab.jimdofree.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関